

上山草人年譜稿(一)

——谷崎潤一郎との交友を中心に——

細江光

(前書)

上山草人は、谷崎潤一郎の生涯の親友の一人で、日本の近代演劇草創期を担った一人でもあり、また、サイレント時代にハリウッド映画で活躍した例外的な日本人でもある。が、その生涯については、いまだ十分な研究が成されたとは言えない。また、谷崎との交友関係の詳細も、これまでは必ずしもよくは分かっていなかった。そこで、不十分なながら、種々の資料と遺族へのインタビューなどから私が知り得た事を整理し、年譜形式にまとめ、御報告して置く。

紙数の都合で、参考文献の記載は簡略を宗とし、初回のみやや詳しくした。また、参考文献の内容と、細江の私注を区別するために、「**■**」を用いた。明治四十四年以降は「甲南国文」第49号(平成十四年三月刊)に掲載する。

なお、上山草人の御子息・三田松五郎さんと御令嬢・高橋梅代さんからは、インタビューに御協力いただき、種々の資料を御見せ頂くなど、御尽力を頂きました。ここに記し、感謝の意を表します。

◆明治十七年(1881) 一歳

1・30

上山草人は、宮城医学校教授上山五郎の次男として涌谷町に生まれる。

本名・貞^{ただし}。母は角川浦路^{つのかわ}で、宮城県涌谷町の名門の医者^{いしや}の娘。五郎と

は愛人関係で、草人を産んですぐに発狂したため、草人は母の顔も知らず、親戚の家を転々とした(1995/1/15 テレビ朝日系列で全国放映され

た東日本放送開局20周年記念・映画誕生100年特別企画「ハリウッド

を駆けた怪優 異端の人・上山草人」での草人の甥・本妻の次男の子・宮城県南郷町在住の伊藤高古氏74歳の証言。

※同パンフレットによれば、上山家は伊達家一門涌谷伊達氏の典医の家柄で、南郷町出身。

※草人『蛇酒』によれば、上山家は木間塚(南郷町)の豪家の出。父は養子。

※草人と隣家で同じ頃に生まれたという菊池貞二『中国四十年の回顧 秋風三千里』「上山草人と私」によれば、草人の父・五郎は南郷村二郷出身で、秀才肌。旧城下町で人口密集地だった涌谷に医院を開業する

際、代々の医者で、老母と娘だけで住んでいた角川家^{つのかわ}を借り、やがて娘・浦路と関係を生じて生まれたのが草人。しかし、医院は二三年で失敗

し、五郎は上京。法律を勉強して弁護士となり【?】、仙台市南光院町に開業。浦路は発狂し、一生、狂人に終わった。座敷牢に閉じ込められていた。角川家は代々狂人を出すので有名だった。草人の祖母・浦路の

継母に当たる人も発狂した。松原伝吾氏は、「河北夕刊」に、草人から「自分は犬養毅の落胤だから字が似ている」、と聞いたと書いている。草人という号も、犬養の木堂と対比したか?

※草人『犬養健のこと』(「文芸春秋」S26/7)によれば、一歳上に兄・貞亮が居る。父は医者だが、犬養毅が率いた国民党の党員で、支部で

役をしていた。

役をしていた。

※犬養毅の息子・健たけらの『女優』(『中央公論』S3/6/7)によれば、草人の父は新聞記者で、犬養毅と自由民権運動で面識があったとする。

※高橋梅代さん・三田松五郎さんによれば、草人本人は、誕生日は二月二十九日のように言っていた。上山家の先祖は駕籠掻きで、殿様の前でおならをしてしまい、お尻を刀で刺されたが、そのまま目的地まで運び、取り立てられたと言う。草人の母方の角川家は、家老の家柄で、上山家とは格が違う。母の浦路は跡取り娘で、当時としては珍しく高等教育を受け、幼稚園教育に携わる筈だった。

※草人『煉獄』には、戸籍は一月三十日だが、父に訊いたら口もつて「十月二十八日」と言ったが、流石に可哀想だと思つて出鱈目を言ったのだろう、とある。

◆明治十八年◆(1885)二歳

11・13 「読売新聞」に、14日の工学会で、三田守一が「坩堝製造に適良なる黒鉛産地の嘶」を演説する、と出る。

・15

牛込区市ヶ谷甲良町34番地に三田千枝(後の山川浦路)誕生。父・三田守一は、旧旗本で帝大卒の鉱物学専攻工学士。後に鉱山技師として成功する。母・小松は勝海舟の身内だったと言う。千枝は愛日小学校・華族女学校卒(三田照子『ハリウッドの怪優 上山草人とその妻山川浦路』) ※高橋梅代さん・三田松五郎さんによれば、三田家は平将門直系。優秀家系。しかし、千枝の母・小松は元芸者。

※太田亮『姓氏家系大辞典』によれば、幕臣の三田氏は、武蔵国荏原郡三田郷より起こった桓武平氏相馬氏族で、将門の子孫との言い伝えもある。

※和田利政「上山草人の思い出」(『樟蔭文学』S29/6)によれば、三田守一は、佐佐木信綱の親戚。

※谷崎『上山草人のこと』によれば、母・小松は元治元年(1864)生まれで、鹿鳴館時代にはなかなかのハイカラ婦人だったと言う『痴人の

愛』のナオミの祖母の設定は、これを転用したものであろう。

※浦路「秘密の楽しみ、秘密の苦しみ」(『中央公論』T7/7)によれば、祖先は旗本で、躰が厳しく、どんな小さな嘘も厳しく罰された為、正直病・開けっ放し病とも名付けた程で、秘密というものは持ったことがない、と述べている。

※谷崎『上山草人のこと』によれば、浦路は長身の草人と同じくらいの大柄で、顔立ちに気品があった。草人が「白象のような」とか「大奥の御殿女中のような」と形容したのが、いかにもその通りの感じだった。

※犬養健の『女優』によれば、浦路は身長五尺五寸(167~170cm)。声のいい、唐代の埴輪人形のように表情の大まかな、いつも落ち着いている、しっかり者だが心持ちの細かい、立派な人だった。

※平凡社『世界大百科事典』「身長」によれば、日本人成人男子の平均身長は、明治初期155cm、大正末期160cm、女子は男子より10~12cm低かった。

◆明治十九年◆(1886)三歳

7・24 谷崎潤一郎誕生。後に草人の親友となる。

◆明治二十一年◆(1888)五歳

★この年か? 『蛇酒』によれば、五六歳の頃、仙台市の劇場で、美しいお姫様に武士が刀を振り上げる場面に恐怖と同時に快感を抱き、それが後のサド・マゾヒズムの原因ともなり、またこの頃から非常な芝居好きになる原因ともなった。

※「ハリウッドを駆けた怪優」パンフレットは、草人は9歳の時に仙台の本宅に引き取られたとする。また、同パンフレットによれば、当時の上山家跡地は、国道四号線(ケヤキ並木の青葉通り)に面し、現在、日本興業銀行仙台支店ビルが建っている。かつての上山家別邸(現在、上山家本宅)の母屋「南山閣」は江戸時代末期に建てられたもので、正岡子規や落合直文などの文人墨客が逗留した事でも知られる。

※『蛇酒』によれば、上山家は、下男下女を会わせると家族は二〇人以

上。父は医者で、仙台の中央に大きな病院を経営し、婦人科が非常に流行っていた。草人の母とは愛人関係だったらしい。母は草人を産むとすぐに発狂し、大正二年現在も、奥州の山奥に体だけが生きている。家族は「気違いの子は気違いになる。この子も十八まで持つまい」と言った。父は草人を愛さず、赤子の時、乳母や親戚の家を転々として育てられた。六、七歳の頃、町外れの別荘「南山閣」から山奥に家出を試みて捕らえられた事もあった。父は儒教的に厳格で、草人は幼少の頃、膝に両手を揃えて、父から朱子学や陽明学を聞かされた。小説・雑誌類も禁じられ、隠れて読んだが、見付かってそれらを焼き捨てられた事もあった。草人は別棟の入院患者室の牢獄のような部屋に、家族と離れて寝起きさせられていた。肉親の愛を知らず、生まれながら孤独だった草人は、母と妹弟への愛を打ち混せて女に注ぐ傾向を持った【この事は、後年、谷崎と意気投合する一因であろう。谷崎の『上山草人のこと』によれば、草人には被害妄想的な所があったと言うが、これも不幸な幼少期に原因があるう】。

※草人の「不動尊信仰談」（「宇宙」S5/12）によれば、父は少年時代の草人に仏教の經典を読ませ、禪の修行をさせ、この事が東北の重厚な天候・自然と相俟って、草人の宗教心を育てた。

※草人「性格俳優の悲哀」（「ニューヨーク新報」T15/3）によれば、草人は詩人・俳諧師・小説家・絵描き・陶器師・役者などになろうとして、その中では役者がやや調子良く行ったが、それでも自分の体内を流れる「あふれるような遺瀨なさ」を注ぎ込み得たと信じられる芸術を持たないのが悲しい【この「遺瀨なさ」は、家庭に恵まれなかったことが原因であろう】。

◆明治二十七年◆（1894）十一歳

5・28 『煉獄』によれば、草人の「近代劇協会」の女優・衣川孔雀は、この年の地久節に生まれた。当時、父37歳、母17歳。4歳年下の弟がある。

【父は安政五年（1858）生まれということになる。】

※ただし、<http://iv.nifty.com/DB/50/ka.html>では、出生地：神奈川県横浜市、生年月日：明治29年5月28日と記載。

※大川新太郎「新劇団裏面史」（「劇団春秋」T12/9）によれば、孔雀は、本名牛円貞子。父はスペイン公使館にいたが、父の死後、母姉妹と大森辺りに淋しく暮らしていた（大笹吉雄『日本現代演劇史』では大使館一等書記官の娘とする）。

※「読売新聞」T2・3・21記事「近代劇の女優」によれば、衣川孔雀は旧西班牙公使館員・牛田競一令嬢・貞子（18）。現独逸大使・杉村虎一の姪。一昨年、実践女学校卒。英人サムス夫人【京橋区明石町にあった私塾英文正鶴学館の創設者 James Summers の娘か？】に語学を学んだ。教養品格は充分で、容姿は松井須磨子・森律子を折衷した観があり、体格は両者を上回る。

※「東京日日新聞」T5・3・29記事「衣川孔雀が尼と発狂の噂」によれば、孔雀の父・牛円競一は、大正五年一月下旬、死去【競一は数え年五十九歳で死去したことになる】。元スペイン公使館員。その後、種々の事業に携わり、一時は数十万の財産を成したが、十年前から精神に異常を来たし、巢鴨病院に入院していた。

※「読売新聞」M37・7・24記事「摩天嶺負傷者牛円大尉」によれば、牛円重二郎大尉（36）は石川県出身。父・元吉、兄・競一（麻布我善坊町住）。

◆明治三十一年◆（1896）十五歳

4 この年、草人は仙台二中（現・仙台二高）に進学したか？

※『佐藤清全集』の年譜によれば、佐藤清（M18/1生まれ）はこの年、仙台二中に入学。草人と親友になる。

◆明治三十二年◆（1897）十六歳

4 三田千枝（後の浦路）は華族女学校に入学。犬養毅の娘・操と同級だったため、親しくなる。この頃、浦路の父は羽振りが好き、浦路はお抱えの車で通学したと言う（工藤美代子『聖林のモンゴル王子』「潮」1985/

10~86/3)

◆明治三十三年◆(1900)十七歳

- 9・23 三田小枝さへ(後の上山珊瑚)誕生。千枝(後の山川浦路)の妹。(『日本映画俳優全集・女優編』1980/12/31「キネマ旬報」増刊)

◆明治三十四年◆(1901)十八歳

★『佐藤清全集』の年譜によれば、佐藤清はこの年から翌年に掛けて、草人や塩釜正吉(M17/11生まれ。のちドイツ文学者)と淡煙会を作り、「七星」という小型の文学雑誌を編集。子規派の俳句を始める。草人は「半月」と号していた。

※高橋梅代さん・三田松五郎さんによれば、この頃から、草人は俳句の投稿を始めた。草人は蕪村・西行が好きだった。芭蕉は好まなかった【子規の影響もあろう】。

◆明治三十六年◆(1903)二十歳

- 3 三田千枝(浦路)は華族女学校を優等で卒業する。千枝の婚約者は、大学卒業後、すぐに結核で死亡。(三田照子『ハリウッドの怪優』)

※千枝の婚約者は介三郎。三田家は優秀家系で、一族の殆どが一高・東大。介三郎も秀才だった。(工藤美代子『聖林のモンゴル王子』)

※『石井柏亭自伝』によれば、千枝の父・三田工学士は滝村家の長女と結婚しており、滝村家の遠縁に当たる介三郎が千枝の養子婿になる筈だった。しかし、介三郎は大学を卒業後、肺を患い、湘南の病院で亡くなり、その後、草人が養子に入った。

- 3 草人は仙台二中(現在の仙台二高)を卒業したか?

※『佐藤清全集』の年譜によれば、佐藤清はこの年、仙台二中を卒業して、二高に進学。

※和田利政「上山草人の思い出」によれば、草人が卒業できたのは全くカニングの御蔭だったと、当時の級友中村某が証言している。

4? 草人は東京に遊学。犬養毅宅へ寄宿し、早稲田大学文科へ通う(「ハリウッドを駆けた怪優」パンフレット所載上山草人年譜では三十五年とす

る)。

※石橋湛山の『湛山回想』によれば、当時、官立高等学校は3年制で9月始まりだったが、早稲田は、明治三十四年、大学を名乗った時から、高等予科を4月始まりの1年半にしていた。

※草人『犬養健のこと』によれば、一歳上の兄・貞亮と一緒に犬養家に寄宿し、早稲田に通学した。草人はテニス部の選手兼文学部のランニングの選手になり学業を怠り、運動に熱中した。安部磯雄先生とも組んだ。犬養の娘・操が華族女学校のテニスの選手になったため、書生たちで犬養邸の広い庭園の芝生にテニスコートを作り、球の打ち方を教えた【谷崎は『鮫人』で、梧桐寛治が学生時代、テニスとボートのチャンピオンだったとしている】。

※「読売新聞」T15・7・17記事「今は老ひても昔は選手(11)」によれば、日本庭球協会の針重敬喜は、早稲田時代、草人と組んで活躍した。当時、早稲田の庭球部は高師・慶応・高商らに連戦連勝、部長の安部磯雄は野球部長も兼ね、両部合同で伊東や鎌倉で夏季練習をやった。

草人は犬養木堂に寄食して早稲田に学び、秀才の誉れ高く、愛嬢・操子の女婿になるのだろうと友達仲間を羨ましがらせたが、操は芳沢謙吉のものとなり、草人は浦路と恋仲になったものの、なかなか仲を許されず、困らされた。

※草人『劇壇秘話』(『中央公論』S5/5)によれば、草人は早稲田大学でランニングのチャンピオンだった。

※犬養健『女優』によれば、草人は、黒目が恐ろしく大きく、印象の強い容貌。器用で、油絵を描き、素人芝居の幹事で、文科の競争選手で、早稲田大学に庭球部を創った一人。熱情家。

明治座で、ヨーロッパ巡業から帰国した川上音二郎が、正劇運動の第二弾として、二月の『オセロ』に続いて、土肥春曙の翻訳で、『ヴェニス商人』の「法廷の場」を上演。音二郎のシャイロックがかなり評判になり、興行的には大成功(木村錦花『明治座物語』)。

6・4

※座談会「新劇三十五年史を語る」（「テアトロ」S13/11）で、草人が言及。新劇の祖は川上音二郎だ、とし、草人も新劇運動を起こした当初は、川上や新派に対して不満を持っていたが、後には、書いてばかりいて実演はほんの数日しかない小山内薫らの劇運動家より、先駆的な仕事をほとんどん実行に移して行った川上に共感し、自らも実行を重視した、と述べている。

※田中栄三『新劇その昔』によれば、草人が最初に師事した藤沢浅二郎は、明治34/4、35/8、川上夫妻の欧州巡業に同行した。この時、土肥春曙も、通訳兼文芸部員として同行したが、藤沢とはとても仲が良く、ホテルではいつも相部屋で、藤沢を「おふじ」と呼んで、女房扱ひした。帰国後、貞奴は女優養成所、藤沢は俳優養成所の創設者となり、土肥も文芸協会演劇研究所の講師となったのは、欧州の俳優学校を見学した影響だろう【草人は藤沢から川上の話を聞く機会があったと思われる】。

9・13 九代目市川團十郎死去。同年、二月十八日五代目尾上菊五郎、翌年八月七月初代市川左団次と名優の相次ぐ死で、歌舞伎は一時、人気を落とし、代わって新派が全盛を迎える。

10・3 本郷座で川上音二郎が我が国初のお伽芝居『狐の裁判』『浮かれ胡弓』を上演（富田博之『日本児童演劇史』）【後に草人が有楽座のお伽芝居に参加したのは、この公演に刺激された面もあるか？】。

※土肥春曙も、川上夫妻との欧州巡業の見聞をもとに、「児童と演劇」（『少年界』M38/4）で、学校や家庭における子供の演劇活動の意義を述べ、明治の演劇教育論として貴重とされる（富田博之『日本児童演劇史』）。

11・2 本郷座で川上音二郎が山岸荷葉の翻案で『ハムレット』を上演。葉村年丸（ハムレット）を音二郎、織江（オフィーリア）を貞奴（大笹吉雄『日本現代演劇史』）。

21 本郷座で新派がトルストイ原作山岸荷葉翻案『復活』全六幕を上演。初日の「読売新聞」所載「本郷座新狂言略筋」によれば、ネプリュードフ

は法科大学生（のち判事）米倉道夫（正夫？）、カチューシャは升原勝代と変えられ、箱根塔の沢の米倉伯爵別邸で契りを結ぶが別れ、十年後、勝代は新橋芸者となり、情夫が勝代の旦那を毒殺した際、犯人と疑われ、裁判所で今は裁判長となっている道夫と再会。道夫の努力にもかかわらず無期徒刑となり、道夫は黒西伯爵令嬢との婚約を破棄する、といったもの。道夫を佐藤歳三、勝代を藤沢浅二郎が演じている。

※「復活」著作権を巡る島村抱月との裁判の際、草人は「武器の奪ひ合ひ（下）」（『読売新聞』T4・3・13）で、「復活」は十数年前、藤沢浅二郎・佐藤歳三が本郷座で姉崎博士らの助言のもとに演じ、その後様々な新派俳優によってやり古されたものだ」と述べている【草人はこの舞台を観た可能性が高い。姉崎嘲風の助言など内幕に通じているのは、この時既に藤沢浅二郎のもとに出入りしていたか、後に藤沢から聞いたかであろう】。

◆明治三十七年（1903）二十一歳

2・10 日露戦争勃発。

※「新劇三十五年史を語る」で、草人は、「新派に入ったの日露戦争勃発の年」と発言。

※『蛇酒』によれば、草人は上京後間もなく土肥春曙に接近し、春曙から新派俳優藤沢浅二郎を紹介され、新派の群れに投じたが、学生だったためもあって、そりが合わなかった。

※「新劇三十五年史を語る」第二回で草人は、土肥春曙と藤沢浅二郎は親しかったと発言。

※上山草人『新劇壇思出話「これが私の小便」—諸口十九君を迎へるに就て—』（『苦楽』T14/8）によれば、早稲田大学通学の傍ら「星貞」という仮名で藤沢の内弟子格となる。

5・8 日露戦争緒戦戦勝に際して、東京で市民大祝捷会が開かれ、十万人余りが集まり、大規模な提灯行列が行われた（『時事新報』など）。

※この夜か？『蛇酒』によれば、提灯行列の夜、海軍省構内の葉桜の

木下闇で草人は浦路と意中を語り合った。

※犬養健『女優』によれば、この時か？ 提灯行列の日、健は草人が浦路に「(操が)冷たい」と訴えるのを盗み聞く。

※三田照子『ハリウッドの怪優』によれば、草人は操と愛し合うようになったが、犬養家は反対し、操を座敷牢に閉じ込めた。

※操は外交官の芳沢謙吉と結婚した。

※犬養健の『女優』は、操が急に結婚することになったのも、草人との恋愛のせいだったと仄めかしている。

この年？ 草人は早稲田大学に進学。

※和田利政「上山草人の思い出」では英文科とする。

※水谷八重子の「おぢさんの御本のために」(『素顔のハリウッド』)によれば、水谷竹紫とクラスメートだった。その縁で(?)八重子は近代劇協会の厳しい舞台稽古を見て、こわいおぢさんだと思った。

※松居松翁「我歌舞伎の永遠性」(『演芸画報』S5/2)によれば、早稲田で三木武吉と同窓。

※『蛇酒』によれば、同郷の友人・寺木定芳とは、小中学校・早稲田の文科まで一緒だったが、寺木はアメリカに留学して歯科医になった。

『煉獄』に、早稲田時代、寺木の友人で草人も知っていた人物として、詩人の星野水裏の名も出る【寺木定芳は、のち衣川孔雀と結婚。泉鏡花の取り巻きて、著書『人、泉鏡花』あり】。

※工藤美代子『聖林のモンゴル王子』によれば、草人は鈴木悦と、早稲田時代からの友人だった。

※草人の「不動尊信仰談」によれば、逍遙のシェイクスピア講義に深く感銘を受けた。

※「新劇三十五年史を語る」では、「逍遙は、シェイクスピアは時代を超越して永遠に残ると力説、芝居の米の飯だと言っていた」と発言。

本郷座で新派の高田・河合・藤沢らがゲート原作松居松葉翻案「フランチェスカの恋」と泉鏡花原作「高野聖」を上演。以後、明治四十年ま

た。

で、新派の第一次全盛期・所謂本郷座時代が始まる(柳永二郎『新派の六十年』大笹吉雄『日本現代演劇史』)。

※伊原青々園「明治三十七年の劇界」(『白百合』M38/1)は、新派の見物客の中心が、学生になったことを指摘。柳永二郎『新派の六十年』に寄せた久保田万太郎の序文(S23/9)でも、歌舞伎に比べると、新派の見物層は、大部分が高等学校以上の学生で、知的レベルがぐんと高かったこと、新派も演出に工夫を凝らし、「本郷座式」という言い方を

さえ生んだ位、写実の限りを尽くしたこと、しかし、新派の現代劇は、遂に上っ面の写実を出なかつたこと、を指摘している。

★この年か？ 草人『犬養健のこと』によれば、犬養家からは一二年で出て、戸塚の蝦蟇館という下宿に入った。隣室に野球部の橋戸頑鉄・弓館小鰐・押川・泉谷らが陣取っていた。

※木村毅『日本スポーツ文化史』によれば、橋戸と押川は明治35年に、それぞれ青山学院・郁文館中学から入学。38年4・6月にはアメリカ遠征に行っている。

★犬養健『女優』によれば、この年か？ 草人は絵の制作の都合があると言って【?】犬養家の近所の寺の離れに移った。その頃、草人は既に美術学校に転校していた【?】。その為、上山家とも犬養家ともまじい関係になり、健だけが始終遊びに行っていたが、やがて、そこで浦路と出会うようになった。草人は送金も断られたため、毎朝、牛乳配達をしていた。

※「新劇三十五年史を語る」での長田秀雄の発言によれば、草人は明治三十九、四十年頃、喜久井町の西方寺という尼寺に居た。

吉井勇が早稲田大学高等予科文科入学。吉井は明治四十一年六月に予科のまま退学。

※谷崎「上山草人のこと」によれば、吉井は早稲田で草人と知り合った。

4・28

牛込赤城神社境内清風亭で、坪内逍遙の指導する朗読研究会の発表会が行われ、東儀鉄笛・土肥春曙・水口薇陽らが「妹山背山」を朗読した（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。

10・27

※「新劇三十五年史を語る」で草人が言及。草人も聴きに行ったか？

7・15

本郷座で新派合同の『金色夜叉』（柳永二郎『新派の六十年』）。

※『蛇酒』によれば、この時、草人が初舞台を踏んだ。

※「新劇三十五年史を語る」第二回で草人は、当時試みられた漢文崩しのセリフの一例として、荒尾譲介の高田実が幕切れに「渴しても盗泉の水は呑まんぢゃあ」と大見得を切って太鼓をドンと打たせ、後は下駄の音と太鼓のへりを叩く音と合わせて花道を入ったのを知っている、と発言。この時の事と推定できる。

※松居松翁「我歌舞伎の永遠性」によれば、星定^{よさだ}【？】の芸名で、五味国太郎・関根達発・新井淳・横山運平らと同輩。花柳草太郎より先輩。『金色夜叉』が初役。勸善懲惡の意味で、大詰に金色の夜叉が現れて、河合武雄の赤檜満枝を中空に引きさらう一幕が付け加えられていた。その夜叉に扮する事になり、力士役に使う肉襦袢を着てその上に金泥を塗り、顔も金色に塗った。夜叉が赤檜に腕を伸ばすと、河合が宙乗りになって雲の間へ姿を消すという趣向。これが当たって二十日間、案外評判だった。

11・10

※谷崎『上山草人のこと』では、草人の美術学校時代のこととするが、誤り。

※田中栄三『新劇その昔』によれば、草人は不断、髪の毛を大百の鬘のように突立て、目を般若のようにギョロつかせながら、大部屋をのし歩いていたので、『金色夜叉』出演以来、皆な彼を「夜叉君」と呼んでいた。その夜叉君も昼間は早大文科の学生だった。

12・1

芝公園紅葉館で文芸協会発会式（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。

※「新劇三十五年史を語る」第二回（「テアトロ」S14/6+7）によれば、草人はまだ学生で、見に行った。

本郷座で新派の『俠艶録』。出演は高田実・喜多村緑郎・藤沢浅二郎ら。佐藤紅緑の新派の劇作家としてのデビュー作（柳永二郎『新派の六十年』大笹吉雄『日本現代演劇史』）。

※恐らくこれ以降、草人「うまのあつた釣友達」（『佐藤惣之助覚え帖』所収）によれば、草人が本郷座の大部屋にゴロゴロしていた頃、座付き作者だった佐藤紅緑から句作の手ほどきを受けた。その頃、やはり紅緑の弟子だった佐藤惣之助と俳句友達になった。

※草人・横尾泥海男^{でかお}の対談「馬敬礼奇譚」（「りべらる」S28/12）によれば、本郷座に居た頃、木下吉之助と相部屋だった。楽屋番が風呂場を覗いて巨根の番付を拵えた。横綱が水野好美、大関が草人、関脇が佐藤紅緑だった。

歌舞伎座で文芸協会第一回演芸部大会。坪内逍遙訳『ヴェニス商人』

「法廷の場」坪内逍遙作『桐一葉』『常闇』を上演。土肥春曙が女形でポ

ーシャ（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。

※「新劇三十五年史を語る」で草人は、大劇場のため、土肥春曙が二日位で声が枯れ、気の毒だったと証言。

※「新劇三十五年史を語る」第二回で、池田大伍と草人が証言する所によれば、当時は新聞・雑誌関係者に逍遙の息の掛かった人が多かったから、批判はなく、世評は良かった。

東京毎日新聞社が、文士劇団「毎日新聞演劇会」を創立。明治座で第1回公演として岡本綺堂作「新羅三郎」・「熊谷陣屋」・森鷗外「日蓮上人

辻説法」・「放心家^{うっかりもの}」を上演。出演は杉廣阿弥・岡本綺堂・栗島狭衣・岡

鬼太郎に、市川新十郎・九女八が助演。以後、M40/7/4〜8新富

座、M40/10/23〜東京座、M41/4/1〜新富座、M42/1/25〜東

◆明治三十九年◆（1906）二十三歳

芝公園紅葉館で文芸協会発会式（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。

下英一『岡鬼太郎伝』

※「新劇三十五年史を語る」によれば、草人も東京座の時に参加したと

◆明治四十年◆(1907)二十四歳

4?

のことが、未詳。また歌舞伎の時、丈の小さい熊谷が出て来たと言っているのは「熊谷陣屋」のことであろう。田村西男・荒川重秀が出て居たなど、詳しい所を見ると、何度か見ているか？

東京美術学校日本画科に入学。『東京美術学校一覽』(明治四十、四十一年)の日本画科第一年に「上山貞(宮城平)」と記載。浦路との結婚以前と推定。

※高橋梅代さん所蔵新聞切り抜き「銃後の神奈川人国記42」によれば、美術学校で近藤浩一路【西洋画科M43/3卒】・岡本一平【西洋画撰科M43/3卒】・永田錦心と同窓。先生だった川端玉章が蒔絵の重箱に入れて来た昼食をこっそり平らげ、代わりに馬糞を詰め込むという悪戯をしたこともある。

※明治39年美術学校入学の小絲源太郎「猿と上山草人」(「オール読物」S31/1)によれば、草人は日本画科に二年ばかり居たが、作品は見たことはなく、動物園で猿の写生をしているのを見かけたが下手だった。既に俳優で、背景の研究に来たという話だった。

※小絲源太郎『冬の虹』『修学旅行』によれば、十一月に美術学校で修善寺に修学旅行に行った際、仮装行列で、草人が腰の曲がった漁師の爺さんになり、扮装のうまいのに驚かされた。近藤浩一路・岡本一平・田中良【西洋画科M43/3卒】・長谷川昇らが一緒にいた。

※谷崎『上山草人のこと』によれば、「かかしや」には小林古径や安田靉彦の色紙が飾ってあった【美術学校時代の伝手によるか?】。

※高橋梅代さん・三田松五郎さんは、草人は美術学校で前田青邨・小林古径と同期とするが、疑問。

通常なら、草人はこの月に早稲田大学を卒業するはずだが、卒業はしていない。

9・17

本郷座で佐野天声『大農』上演(柳永二郎『新派の六十年』)。

※「新劇三十五年史を語る」で草人が言及し、左翼劇の芽生えも既にそ

11・22
25

の中にあつたとする。

本郷座で文芸協会第二回公演『ハムレット』。

※「新劇三十五年史を語る」によれば、草人はこの時既に本郷座で役者をしていて、ハムレットの顔粧りを友人として助けた。

※「新劇三十五年史を語る」第二回では、土肥春曙と藤沢浅二郎が親しかった関係で、頼まれて舞台の世話もし、団右衛門(当時は中村太郎)・市川新十郎などと一緒に顔粧りの手伝いをした。それを逍遙が見ていて、眉が濃いつか色気がどうか注文を付けるので、また直した、と言。

神田三崎町の東京座で新派が合同し、「先代萩」「忠臣蔵六段目」「市原野」「車引」「妹背山御殿」を上演。以後、翌年十一月まで、藤沢浅二郎は、高田実・河合武雄らと東京座に拠つた(柳永二郎『新派の六十年』)。

※『煉獄』で、浦路が「三崎町時代に二人でよくこの卵うどんを食べに来ましたっけね」と言う所があるが、この東京座時代を指すか？

◆明治四十一年◆(1908)二十五歳

3・14

★この年? 草人の長男平八誕生。小松が引き取って育てる(三田照子『ハリウッドの怪優』ただし四十二年とする)。

草人は、犬養毅の仲人で千枝(浦路)と結婚。三田家の婿養子(三田貞)となる(三田照子『ハリウッドの怪優』)【結婚後は、三田家に同居させて貰ったか?】。

※犬養健『女優』によれば、浦路の母が何度も足を運んだ結果、二人は犬養毅の仲人で結婚した。が、犬養家は以後、年始や盆ごとに挨拶に来る浦路に対しても、冷たい態度であしらつた。

6

東京座で、巖谷小波『世界お伽噺』百編完成記念お伽祭開催。巖谷小波作「兄弟星」などのお伽芝居が上演された(富田博之『日本児童演劇史』)。

※巖谷小波『私の今昔物語』によれば、3日続き。天野雉彦・石川舟

この夏？

9・15

11・4

らお伽倶楽部の俳優を主とし、市川久米八も参加。その時、草人も出演を希望したが、東北訛りがあり、動作も不器用な方なので、漸く「朝星夕星」「兄弟星」？の番卒という仕出し所に甘んじた。

（或いは翌年夏？）、『蛇酒』によれば、草人は立山に登った。

川上貞奴が帝国女優養成所を創立（田中栄三『明治大正新劇史資料』）。

神楽坂の高等演芸館（もと和良店）主人の支援で藤沢浅二郎が開いた東京俳優養成所の入学試験が行われ、二百五十名ほどの志願者のうち二十三名が合格。小山内薫が受け持った舞台度胸の試験では、草人が九十点

で最高点だった。授業は11月11日から毎日七時間。修業年限は三年。劇術の時間に土肥春曙が来て、『ヴェニス商人』のエロキューション

で、草人がシャイロックをやった。北村季晴・初子夫妻の声楽の他、洋画・日本画まであった。草人は、藤沢師匠が俳優養成の仕事をやりたい

という話を聞くと、早大の友人十川兵三郎と日疋重亮の二人を誘って、早速生徒にしてくれと申込み、蔭でいろいろと応援した。しかし、開校

後、間もなく、草人は芸術概論の講師をしていた榎本清を排斥する運動を始めた（田中栄三『新劇その昔』）。

※草人『新劇壇思出話』によれば、草人は俳優学校創設の建白書を書いた発頭人であり、俳優学校の最初の学生募集の際には試験委員の一人とな

った。

※伊原青々園『続団菊以後』によれば、藤沢の背後には榎本清が居て、この人が最初から一切のことを切り回していた。

※田中栄三『明治大正新劇史資料』に、東京俳優養成所開所式（11月28日）の写真があり、草人も写っている。

※「新劇三十五年史を語る」で、草人は、「女優も養成するように大いに説いたが、真奴の方から女優はこちらに任せてくれ、と言われ、入れなかつた」、と証言。

※「新劇三十五年史を語る」第二回の田中栄三の証言によれば、藤沢浅二郎は新派の後継者を作るつもりで、新派の演技を教えたが、講師の小

12・1

◆明治四十二年（1909）二十六歳

山内薫・榎本清は新しい演技を教え、生徒は皆、新劇の方へ行った。同じく草人の証言によれば、他の新派の頭領は、高田も河合も養成所を冷笑し、応援しなかつた。藤沢は、新派の人たちが大金を手にして妾を囲っているのを見て、それだけの費用があれば、みんなでやり続けることが出来るのに、としばしば草人に言っていた。

有楽座開場。全館椅子席、出方なし、食堂・休憩室を備えた我が国初の洋風劇場（『都新聞』など）。

★この年まで、草人は東京美術学校日本画科に在籍し、中退したらしい。『東京美術学校一覽』（明治四十一年、四十二年）の日本画科第一年に

「三田貞（東京士）」と記載。同四十二年、四十三年には記載なし。

★この年、新派は過去の当たり狂言を蒸し返すようになり、十一月に「自由劇場」が発足すると、学生層は新劇へ向かい、凋落の兆しはつきりする（大笹吉雄『日本現代演劇史』）。

田中栄三は芝南佐久間町にあった浦路の実家・工学士三田鋳業事務所に草人を訪問。その後、間もなく、教授会で草人の退校処分が決定。草人は藤沢浅二郎夫妻を短刀で脅すなどして、復校しようと試みたが果たさ

なかつた（田中栄三『新劇その昔』）。

有楽座で、第一回子供日。以後、毎土日祝祭日の昼を子供日として、お伽劇などが上演され、大正九年、帝国劇場に併合されるまで続いた（富田博之『日本児童演劇史』）。

※『国劇要覽』によれば、巖谷小波・久留島武彦を顧問に、天野雉彦・石川木舟・栗島狭衣・佐々素影らが技芸員。栗島すみ子・夏川静江らも出演した。

※秋庭太郎『日本新劇史』では、石川木舟が有楽座創立当初から興行担当の付人になっていた関係で子供日が実現したと推測される。

※安井美然『上山草人との一問一答』（『映画時代』S2/2）によれば、上野の美術学校に一時期居た。もっともみんなは漫画家になった方

4

がいいと言っていた。その頃、巖谷小波を顧問としたお伽劇団が新築の有楽座に出来て、草人は美術学校に籍を置きながら、ちよいちよい出演した。毎日、上野動物園の熊を観察して稽古した。

※『素顔のハリウッド』の栗島すみ子の序文によれば、有楽座のお伽芝居で、草人は熊の役で、子兎役の栗島すみ子らと一緒に出演した事がある。

※栗島すみ子は明治42年3月から4年ほど子供デーに出演していた(富田博之『日本児童演劇史』)。「草人の出演は3月以降か?」

花柳章太郎は、京都明治座で『俠艶録』大詰めで気が狂った力枝にからむ草刈り娘を演じる(大笹吉雄『花顔の人 花柳章太郎伝』)。

※草人「暑い話涼しい話」(『演芸画報』S6/8)で、「新派では一度だけ、草刈りの女役を女形で演じたが、失敗した。その時は、新派に入ったばかりの花柳章太郎も一緒だった」と述べているのはこの時のことか? 同文によれば、「この後、間もなく早稲田『演劇研究所の意か?』に通い出した」とする。「在外日本人珍談奇行座談会」(『世界知識』S11/12)での草人の発言によれば、当時、高田や藤沢は、めぼしい役をした者に賞を出していたが、草人は草刈り女で二等賞を貰った。

5・1

錦輝館で横田商会提供「新桃太郎」封切り(『日本映画作品大鑑』)。

※滑川・菅編『近代日本の児童文化』富田博之「明治期の児童演劇」によれば、明治四十年五月に久留島武彦が、自作の「新桃太郎」と巖谷小波作「牛若丸」を上演している。【その映画化か?】

※草人は、活動弁士の岩藤思雪が栗島狭衣一座を使って製作した児童用映画「新桃太郎」「カチカチ山」「牛若丸」などに出演した(『日本映画俳優全集・男優編』1979/10/23「キネマ旬報」増刊)。

※田中純一郎『日本映画発達史』によれば、岩藤思雪は、後のプロレタリア作家・岩藤雪夫の父で、エム・パター商会の弁士だったが、自ら監督も務め、有楽座に毎土曜日に催される子供デーに出ていた栗島狭衣一座を使って、「新桃太郎」などを製作した。この頃、岩藤は、本郷座に

5・1

出演していた新派の若手俳優を使って、「日本桜」「金色夜叉」「不如帰」なども撮影した。

※武田正憲『諸国女ばなし』によると、草人は、日活の前身たる目黒にあった吉沢の撮影所のお伽芝居の映画にエキストラとして出演したりしていた。天野雉彦らと提携して写したのが「牛若丸」。

※田中純一郎『日本映画発達史』によれば、吉沢商店目黒撮影所では明治四十二年から文芸顧問に佐藤紅緑、俳優養成所に藤沢浅二郎を招聘している【その関係であろう?】。

※徳川夢声『自伝夢声漫筆大正篇』「蒲田1921年風景」に出る叔父の天野雉彦から聞いた話によれば、お伽芝居の一党が撮った「桃太郎」「カチカチ山」などは、神田錦輝館あたりで大好評だった。「カチカチ山」では上山草人が樵夫に扮してチラリと現われ、栗島すみ子が兎の子になってヨチヨチ現われる。「桃太郎」では、花柳徳之輔が桃太郎、鬼の親玉が栗島狭衣、鬼の子分が村尾緑児、雉が田口桜村、他に天野雉彦・石川木舟など。

大久保余丁町に借りた仮校舎で、文芸協会演劇研究所の始業式が行われた。この日入学したのは伊藤理基・掬月晴臣・林和・九里四郎・佐々木百千万億(佐々木積)ら男子十名、女子は小林正子(≡松井須磨子)、五十嵐よしのの二名。数日後、追加試験に合格して三田千枝子(浦路)・武田正憲・林長三らが入所した(『劇壇』T13/8伊藤理基「新劇の苗圃時代」)。

※木村毅『日米文化交渉史』「学芸風俗編」によれば、華族女学校校長乃木希典から、同校卒業生が河原乞食の群に落ちるなどあるまじきこと、と強い反対が出たが、新聞記者が坪内博士の仕事の意義を説いて、納得させたと言う。

※浦路「私の女優生活と其周囲」(『中央公論』T2/7)で、女優になった動機は、草人の感化で芸術に憧れたことと、夫の事業を助けたいため、と述べている。

※伊原青々園『続団菊以後』によれば、浦路の実家が土肥春曙と知り合
いとかで、女子では真っ先に申し込んで来た。

※『蛇酒』によれば、土肥春曙の縁故で草人・浦路ともに文芸協会に投
じた。この頃か？ 草人は浦路の広すぎる額に似合うように、天平時代
の結髪を模して女優髻という結び方を案出してやった。【M35/9 藤島
武二「天平の面影」などからヒントを得たか？】

※女優髻は、浦路・衣川孔雀・上山珊瑚らが結った他、帝劇女優・松井
須磨子ら大正時代の女優を代表する髪型となった（戸板康二『物語近代
日本女優史』）。

7
研究生・伊藤理基の日記に、「この日、写生（擬態擬声）を女子がやっ
たが、五十嵐（芳野）は洒々しく、三田（浦路）は年がいつてるだけ落
ち着きがあり、小林（松井須磨子）ははにかんで形になっていなかった
た」とある（伊藤理基『新劇の苗圃時代』）。

夏

武田正憲『諸国女ばなし』によると、この頃、西大久保の西向天神（北
野神社）の下に、草人草堂と名付けて瀟洒な閑居を構えて世を白眼視し
ていた草人と浦路の家に、この夏から約一年間、武田正憲が同居し、間
もなく掬月晴臣・林長三が短期間、加わった。草人たちは、演劇につい
ては、自然さを何より大切と考えていた。草人には、人を惹き付ける力
があると同時に、専制君主的で、反感を持たれる点も多分にあり、反感
を持たれるとなおのこと曲がって出るような所もあった。草人は囲碁・
絵・文章・テニス・俳句が出来た。浦路は、弟子を取って琴を教えて家
計の足しにしていた他、声楽も観世流の謡曲も出来た。草人は美術学校
中退後、寺崎広業の塾に入った【武田正憲の情報は、明治四十二三年頃
についてのものが中心と考えられる】。

9・21

坪内逍遙邸内の新築校舎披露会（『演劇博物館資料ものがたり』所収
「後期文芸協会の日誌」）。

30

研究所で補欠生の入学試験（『後期文芸協会の日誌』）。
※武田正憲『諸国女ばなし』によれば、草人は既成劇団に居たことや、

ストライキの前科があるので、及第は危ぶまれたが、「自分は今まで芝
居の悪いところばかり見て来ました。どうかいい方へ導いて下さい」と
いう口上が逍遙のお気に召したのか、演劇研究所への入学を許可され
た。

※『日本映画俳優全集・男優編』によれば、この時の保証人は土肥春
曙。

※田中栄三『明治大正新劇史資料』に、開所記念写真あり。草人・浦路
ともに写っている。

※「新劇三十五年史を語る」第二回で草人は、逍遙が、歌舞伎は何でも
在り来たりの型に嵌めようとするからいかん、と言っていたこと、新派
を認めて居なかったこと、研究所の月謝は三円だったことを証言してい
る。

※『蛇酒』によれば、草人は文芸協会時代に扮装術に熱中した【これが
後年、ハリウッドで役に立つ】。

※草人『素顔のハリウッド』によれば、演劇研究所に入ってから、三田
貞は上山草人、千枝は上山浦路を芸名とした。「草人」とは、短歌・俳
句をよくした彼の俳号で、田舎者または案山子の意味であり、着た切り
雀で田んぼへ突っ立ったまま動きが取れないという謙遜を込めた名前前
である。

※『蛇酒』『煉獄』の主人公を香山草二としたのは、草人と音を通わせ
ただけでなく、「草爾たるつまらない者」という意味を含めているよう
である。『煉獄』第十二章参照。

※松本克平『日本新劇史』では、「草人」は彼が好きだった王冑の句
「庭草無人随意緑」から取ったものとする。

※「浦路」は、若くして亡くなった草人の母の名前から付けたもの（三
田照子『ハリウッドの俳優』）。

◆明治四十三年◆（1910）二十七歳

★この年【または前年？】、草人の長女袖子誕生。小松が引き取って育

てる(三田照子『ハリウッドの怪優』)。

★この年か? 武田正憲『諸国女ばなし』によると、草人は二十七か八で徴兵試験を受けたが、精系静脈怒張ということで逃れた。

4・3 「読売新聞」「はなしだね」に、この春、美術学校卒業制作で最高点を取った山内神斧の作「結願」の天平式麗人のモデルは、友人の細君に当たる上山浦路の古典的に余裕のある表情姿態を殆どそのまま写生したものだそうだと出る。

※『東京美術学校一覽』によれば、山内神斧(本名・金三郎)は、明治43年3月、日本画撰科卒。

※『蛇酒』によれば、草人は浦路のために、天平時代の結髪を模した女優髻を案出した。それが「天平式麗人」と評されたか?

※山内金三郎「谷崎さんと「これくしょん」」(「これくしょん」S40/10)によれば、山内金三郎は、卒業後、郷里大阪に帰って画廊吾八を経営。当時、画廊は、吾八の他には、東京の高村光太郎の琅玕洞しかなかったため、若い芸術家の倶楽部のような役目を果たし、里見弴・志賀直哉・園池公致・三浦直介・市川猿之助・小山内薫・上山草人などがよく訪れた。谷崎潤一郎も来た【草人の場合は、美術学校以来、付き合いがあったのであろう】。

東京座で新社会劇団が中村吉蔵の『牧師の家』上演(田中栄三『明治大正新劇史資料』)。

※「新劇三十五年史を語る」で草人が、中尾篤夢が女形で出演していたと証言。ただし『無花果』と取り違えている。

7・10 演劇研究所試演会でイブセン作『ヘッダ・ガブラー』の土肥春曙による翻案『鍬木秀子』に山川浦路が出演(田中栄三『明治大正新劇史資料』)。

※「ヘッダと浦路子」(M45・6・6「読売新聞」)によれば、他の役は松井須磨子・五十嵐よしのらが一幕交替でやったが、ヘッダだけは浦路が一番ということ、替わらずにやったと言う。

11・5

演劇研究所試演会でグレゴリー夫人作・松居松葉翻案指導『噂のひろまり』(田中栄三『明治大正新劇史資料』)。

※伊原青々園『続団菊以後』によれば、草人が主役をしたのが実にうまかった。

12・25 「読売新聞」「小消息」によれば、草人夫妻が新橋倶楽部前に「かゝしや」という化粧店を出した。夫妻が化粧術・扮装術研究の余暇に発明した演劇用婦人用の口紅頬紅眉墨目張その他の新顔料(新案特許品)を売り出す。

※かかしやは芝区日蔭町一丁目一番地にあった。

※浦路の『ピラの新劇』(『羅府新報』S22・1・1)によれば、草人は研究心の強い人で、碁石形眉墨と、それまで日本になかった黄色い白粉を発明したので、浦路の父母が店を持たせてくれて、これがその後、日本での演劇活動や渡米後の生活の支えともなった。

※かかしやの商売の実態については、浦路の日記「朝から晩まで」(『趣味』T2/1)が詳しい。

※「ヘッダと浦路子」(M45・6・6)によれば、草人の発明した特製の眉墨が好評で、今では東京大阪京都の他、ハルピンまで荷を送る。かかしやの二階の六畳は、草人の好みで、柱・梁・戸棚・器具、すべて風雅な竹や朽木や網代作り。逍遙が揮毫した「壮士惨不驕」の扇面の下に、イブセンのブロンズ像とオルガン。

※「新劇三十五年史を語る」第二回の池田大伍の説明によれば、「壮士惨不驕」は、杜甫が安祿山を褒めた詩句【後出塞】の二にある【で、逍遙が自分たちは劇界の謀反人だとして引いたもの】。

※谷崎「上山草人のこと」によれば、階下は飾り窓のうしろに3畳か4畳くらいの2部屋、2階は8畳に鰻の寝床と言われていた長4畳。眉墨の他には、紀州熊野の名産「音無紙」という桜紙のような紙がぼつぼつ売っていた【ただし大正五年以降のこと】。

※『蛇酒』によれば、草人は扮装術に熱中した後、半年間ほど様々な薬

品・香料を買い集め、化粧品製造に熱中し、かかしや開店の際には、白粉・化粧水・香油・歯磨・洗い粉まで、一切自分で製造して売り出した。その中で「碁石形眉墨」がよく売れたため、それで生計が支えられた。（この頃か？）アメリカで成功した父方の従兄が帰国して、四谷で馴染んだ芸者を落籍し、草人がもと住んでいた大久保の家【西向天神下の草人草堂？】に世帯を持ったが、再びアメリカに戻るようになったため、その女を女優に仕立ててくれと言って、草人に預けて行った【後の一条汐路】。この従兄の付き合いで、吉原角海老に泊まった際、草人はお職・揚巻をあてがわれたが、ただ世間話だけをして帰った所、四五日後に揚巻がかかしやを訪ねて来て、その後、一二度揚巻の許に通った。揚巻は吉原の大火【M44・4・9】前後に身請けされたが、その旦那と共に、女優になりたいと言って来た。一条汐路も揚巻も、ものにはならない事が分かっていたが、有楽座が女優を募集した時に、草人が保証人になって廻して遣った。

※田中栄三『明治大正新劇史資料』によれば、有楽座女優劇は、帝劇女優劇を真似ようとしたものだったが、半年程度にわか仕込みだったため、T1/10、T2/1、4の三回試演しただけで、惨憺たる結果に終わった。一条汐路は三回とも出演している。

※武田正憲『諸国女ばなし』によれば、草人は一度、新吉原の大籬・大文字に遊んで、お職の大巻に惚れられた。その大巻が、大久保の草人の家を訪れた事がある。

A Short Chronological History of the Life of Sojin Kamiyama ; His Friendship with Junichiro Tanizaki

Hikaru Hosoe

Abstract : Sojin Kamiyama, one of the key figures in the creation of the modern Japanese theatre, was a friend of Junichiro Tanizaki throughout his lifetime.

He is also known as one of the few Japanese actors who performed in Hollywood silent films in the 1920s. However, his life has not been sufficiently studied ; his fellowship with Junichiro Tanizaki has not been fully investigated either. This paper presents his personal history based on various data, information and interviews with members of his family.